

V 額田部地区の景観

景観それ自体も貴重な歴史資料であり、とりわけ歴史地理学の分野では基本的な資料として位置づけられている。1963年と1997年の航空写真を併置したが、額田部地区の景観もここ三十数年で大きく変化したことが知れる。1963年ごろには額田寺図に描かれた地形や地物が多く遺存しており、奈良時代の景観を彷彿とさせるものがある。小手池（御池）、（東池）も往時の姿を伝え、丘陵裾部の線も図に描かれた山丘をよく伝えている。この地域の景観が大きく変化したのは、1960年代後半から始まった昭和工業団地の造成であり、その後額田部地域の西半分は準工業地帯に、東半分は市街化区域に編入され、さらに佐保川と初瀬川の合流地点に流域下水道浄化施設が建設されるに及んで、往時の景観は大きく失われた。しかし、残された景観の断片から図に描かれた奈良時代の様子をうかがうことができる。

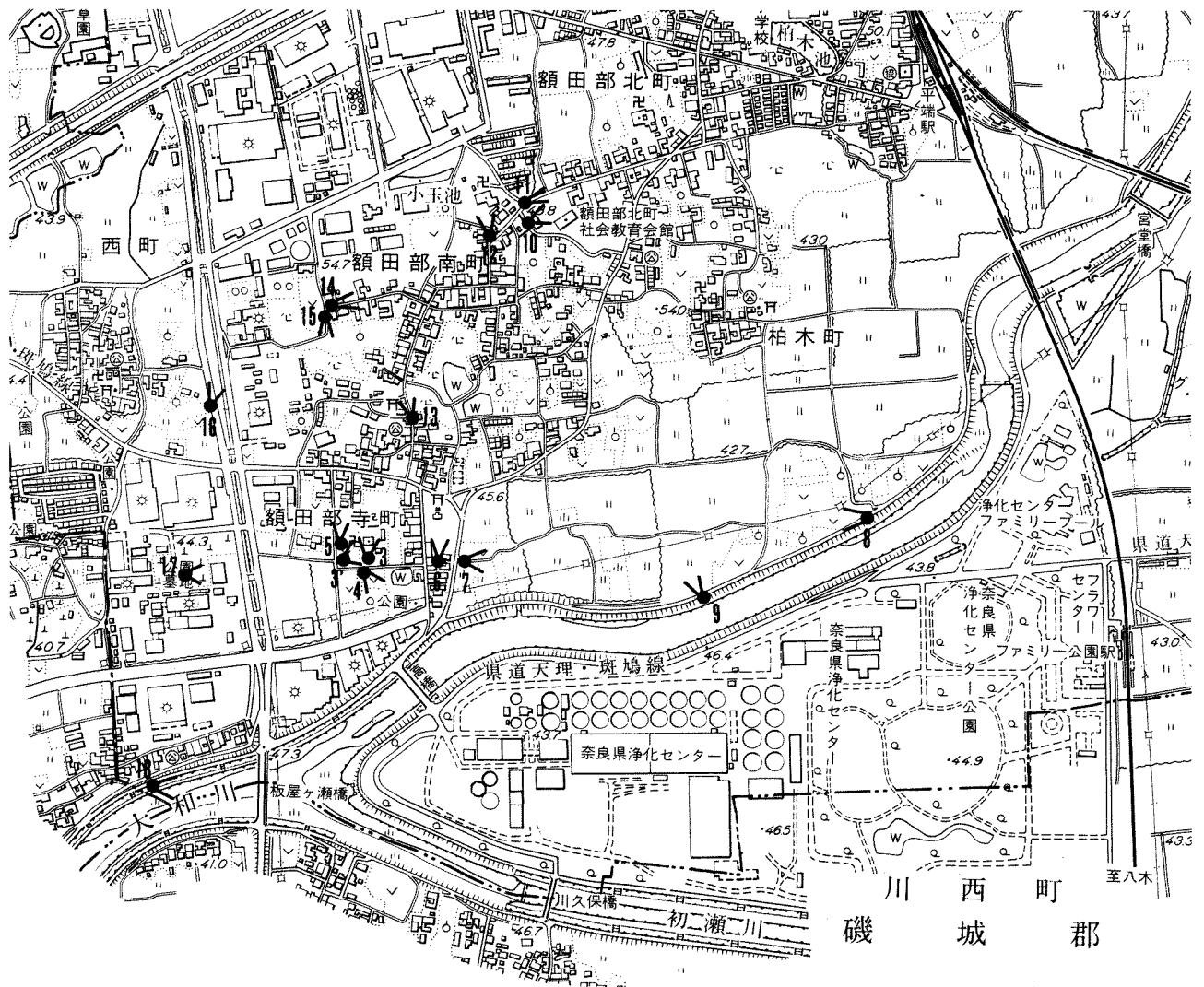


図1 景観の地点（番号は写真の番号と対応）



写真1 額田部地区の航空写真 (S=1:10,000, 1963年9月28日撮影)



写真2 額田部地区の航空写真 (S=1:12,500, 1997年11月3日撮影)

写真3 額安寺

現在の額安寺は本堂一字を残すのみである。山号は熊凝山、真言律宗で、本尊は十一面観音菩薩像である。現在の本堂は奈良時代の講堂の位置に建てられていると推定されている。

鎌倉時代には、律宗西大寺の学僧である叡尊、忍性が復興に勤め寺観を再整備したが、明応8年(1499)赤沢朝経(沢蔵軒宗益)に焼き払われ、慶長2年(1597)秀吉による寺領安堵を機に本堂を再建し現在にいたっている。

本堂は桁行5間、梁間4間、寄棟造、本瓦葺で、大棟の鳥衾や降棟の鬼瓦の銘から慶長11年の建設であることが確認される。伝統色の強い五軒仏堂で、外観の意匠や内部空間を復古調とするなど、近世初期の大和の建築界の特質をよく現している。



写真3 額安寺本堂

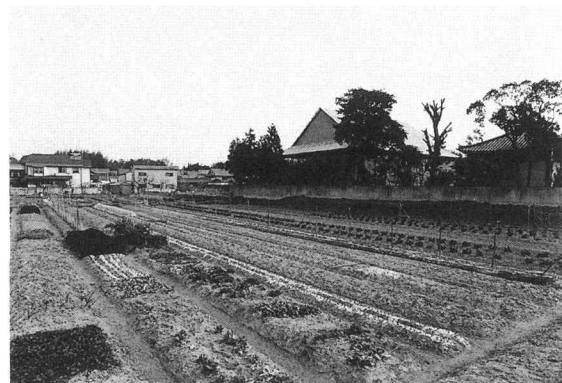


写真3' 現在の額安寺本堂 (南西から)

写真4 額安寺前の水田と畑地

現在の額安寺の南側は水田，畑，雑木林，竹藪などに利用されている。この辺りに中門が比定されるが，発掘調査による確認はなされていない。

畑地には瓦片，凝灰岩片が散布し，多数の軒瓦が採集されている。



写真5 額安寺西側の土塁

幅約5m，高さ約2mの土塁が寺の西側に南北約125mにわたり遺存している。

発掘調査でこの土塁の西側に付設された溝が検出され，中世に築かれたものと考えられているが，奈良時代の築垣の位置を踏襲している可能性がある。



写真6 推古神社

参道から拝殿をのぞんだところ。推古神社はその名のとおり推古天皇（豊御饌炊屋姫）を祭神とする。本殿は全長約41mの西面する前方後円墳である推古神社古墳の上に建てられている。10条3里36坪の瓢箪型の表現が古墳に当たる。



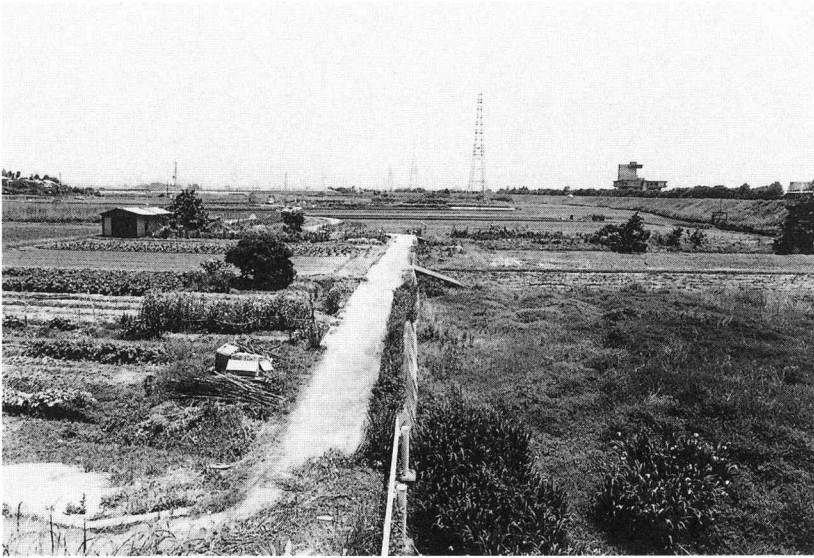


写真7 佐保川右岸の氾濫原地帯

現在は主に水田として利用され、堤防沿いの部分、丘陵の最末端部が畑地などに利用されている。図でも「寺田」、「公田」、「田」などの利用が著しいところ。



写真8 佐保川北側の氾濫原

佐保川の右岸堤防に沿う部分。旧河道や蛇行洲に相当するため畑、植林地、果樹園などに利用されている。図でも「楊原」、「椽林」などの土地利用がはかられている。



写真9 道慈山

佐保川右岸堤防上から氾濫原をとおして「道慈山」という小字が残る舌状丘陵を望む。住宅が密集しているところ。図にもこの舌状の地形が明確に表現され、「法花寺庄」という墨書がある。

写真10 東池

現在の東池は図の9条3里22・23・26・27坪に描かれた池をそのまま踏襲したものであるが、近年埋め立てられて、北側にわずかの面積を残すだけとなった。基本的には一方堤の溜め池で、主に雨水で入水、北側の樋から出水し、池の北側の谷状地形に広がる養水となっていた。



写真11 東池の道路と民家

東池の北側堤体から東側を望んだところ。中央の道は図にも描かれている道で、額田部丘陵を北東から南東の方向へ貫く主要な道に相当する。



写真12 融通寺

融通念仏宗の寺院で、創建は元禄元年(1688)と伝える。寺号は「船墓山」。寺が立地する小丘陵は北側に伸び、その先端部分に船墓古墳が造られている。図には「船墓 額田マ宿祢先祖」と墨書され、当時の祖霊信仰を物語る。





写真13 鎌倉坂

重要文化財（建造物）に指定されている額安寺五輪塔の東側を南北に通じる坂道があり、鎌倉墓（五輪塔）に因んで鎌倉坂と呼ばれている。この道は図には描かれていない。近世には筒井方面と通じる道で、鎌倉街道と呼ばれていた。



写真14 道と家並み

額田部丘陵の最高所を占める「西山」の東側の家並み。中央の道は東池北側の道につながる。この道も奈良時代から続いていると考えられる。



写真15 「西山」の裾の道

西山の東裾をとおり狐塚古墳の南側にぬける道である。丘陵の鞍部をぬうこの道も自然発生的に開道したもので、奈良時代からつづく道である。

写真16 額田部狐塚古墳

墳丘全長約50m、周濠と外堤を伴う中型の前方後円墳であったが、現在、後円部のみが道路下に保存された状態。竹が生い茂っている部分が後円部に当たる。図の9条4里15・16・21・22坪の交点に描かれた瓢箪型の「墓」に相当する。当時、周濠が「寺田」として利用されていたことが知れる。



写真17 来迎墓ノ間古墳群

小規模な前方後円墳、円墳、方墳から構成される群集墳で、現在公園墓地の中に保存されている。墓石が林立し、盛り上がっているのが墳丘である。10条4里13・14・23坪に描かれた円形、その他の表現がこれに当たる。額田部の惣墓となっている。



写真18 大和川

佐保川と初瀬川などが合流する場所は、水運の拠点として重要な地点である。近世には板ヶ瀬と呼ばれ、魚梁船の特権を独占することで額田部は大きく発展した。大和川水運との関連も額田部氏や性格や額田寺の成立の事情を考えるうえで重要である。

